美少女騎士
シエラ
私に勝たないと
恋人にして
あげないんだからっ!
二次元ぷち文庫
2D PETIT POCKET NOVELS
天草白
表紙イラスト
秋月からす
試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『美少女騎士シエラ
私に勝たないと恋人にしてあげないんだからっ！』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

美少女騎士
シエラ
私に勝たないと
恋人にして
あげないんだからっ!
天草白
表紙／秋月からす
二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

シエラ

王国の騎士団に所属する少女騎士。剣の腕は騎士団最強クラスで、自分より強い相手でなければ恋人にしない、と公言している。

カイル

同じく騎士団所属の青年。騎士団の中では昼行灯状だが実際の剣の実力は高い。勝ち気でまっすぐなシエラに惹かれている。

嵐のような斬撃に見舞われ、カイル・バレットは反撃の隙を見出すことさえできなかった。対戦相手の剣技は華麗にして苛烈。稲妻のごとき速度で剣先を突きこみ、怒涛の勢いで打ち込んでくる。一撃ごとに剣撃は鋭さを増し、カイルは徐々にさばききれなくなってくる。

「くっ、これ以上はもう……」

騎士兜の下で、カイルの額からぬるい汗が流れ落ちた。

耐えきれない……そう思った次の瞬間、甲高い金属音とともにカイルの剣が宙に舞った。回転しながら地面に突き立った己の剣を呆然と見下ろしたときには、すでに胸を覆う甲冑に鋭い切っ先を押し当てられていた。

「はい、私の勝ち。まだまだ修行が足りないわね、カイル」

カイルの胸元に剣を突きつけた姿勢で、相手の騎士が勝ち誇る。剣をおさめると面頬式の兜の留め金をはずし、カイルの目の前で兜を脱いだ。

渦巻く炎を思わせる真紅の髪の毛が鮮やかに舞った。兜の下から現れたのは、荒々しくも猛々しい剣技のイメージを裏切るかのような、可憐な少女の相貌だ。

整った顔だちは意志の強さを表すように凛々しく、藍色の瞳は鋭い輝きを宿している。真紅の髪は頭頂のところでポニーテールにまとめてあり、まっすぐに垂れた髪の毛の先端が風に揺られて小気味よく跳ねる。

シエラ・エンフィールド。カイルと同じく白翼騎士団に在籍する騎士であり、弱冠十七歳にしてすでにエルヴァニア王国でも五指に入る剣士との呼び声も高い天才少女。

「いやー、やっぱりシエラは強いね。ほとんど何にもできないまま完敗だよ」

カイルは兜をはずしながら感嘆交じりにつぶやいた。負けた悔しさよりも、シエラの鮮やかな剣技に対する賞賛の気持ちのほうが強い。敗北してなお清々しい心地だった。

「もうっ、へらへら笑わないでよ、カイル。女の私に負けて少しは悔しいと思わないの？これで私の九十九勝〇敗よ。たまには私に勝ってみせたらどうなのよっ」

シエラは口早にまくし立てながら、とたんに不機嫌な顔になった。桃色の唇を尖らせ、不満をあらわにしてカイルをにらみつける。剣の鍛錬中は厳しく凛々しい少女騎士も、こういう顔をすると年齢相応に可愛げがあった。

「シエラに勝つのはさすがにちょっと……王国の大将軍でも無理じゃないかな」

「あーあ、どいつもこいつも骨のない男ばかりね。情けない。いったい、いつになったら私に恋人ができるのかしら」

シエラは大仰にため息をついてみせた。

カイルは内心で同じくため息をつきつつも、シエラが未だにそんなことを考えていると知って驚く。自分よりも強い相手じゃないと恋人にしない——とは、シエラが常日頃から公言していることだが、まさか本気だとは思わなかった。

大体そんな条件をかかげていたら誰もシエラの恋人になれないだろう。彼女の腕は白翼騎士団最強のひとりといってもよく、騎士団内で彼女に太刀打ちできるものは数えるほどしかいないだろう。

カイルはあらためて同僚の少女騎士を見つめた。

訓練のために実戦用の重武装ではなく、簡素な胸甲と籠手、足甲を身につけただけの姿だ。女性用の胸甲は、シエラの豊かな胸に合わせて美しい二つの膨らみを作ってあるし、むき出しの二の腕や太ももは日焼けには無縁の白さを誇り、まぶしいほどの光沢を放っていた。

二十一歳のカイルよりも四つ年下で、同期入団の騎士でもある少女はあいかわらず魅力的で、こうして向かいあっているだけでも心臓は自然と早鐘を打ってしまう。汗に交じり清涼感のある乙女の匂いがただよい、カイルの鼻腔を刺激する。

「なに、さっきからジロジロ見て」

「い、いや、なんでもないよ」

カイルはあわてて手を振った。実際、戦女神もかくやという凛々しい姿に見とれていたのだが、そんなことをこの勝気な少女に正直に告げたら、いったいどんな目に遭わされるかもわからない。きっと激怒してカイルを怒鳴りつけるだろう。

シエラはその手の色恋沙汰にはまるで縁がなく、ちょっとした冗談を言うだけでも容赦

なく相手を滅多打ちにするほど気が強いのだ。わざわざ逆鱗に触れるほどカイルは酔狂な性格はしていない。

「次の模擬戦では私に勝てるようになりなさいよ、カイル」

「無理だよ、そんなの」

「あなた、他の騎士たちに馬鹿にされてるのよ。昼行灯だのヘタレ騎士だの……たまにはびしっとしたとこ見せてくれてもいいじゃない」

「だから無理だって……僕は本当に昼行灯でヘタレなんだから」

「もうっ。ぼやぼやしてると、私、他の誰かに負けるかもしれないよ。私を打ち負かして恋人にしてやる、というくらいの気概はないの？　……ずっと待って……のに」

最後の言葉は妙に小さく、発音も不明瞭だったため、カイルにはよく聞き取れなかった。

「ん、なに？　最後なんて言ったの」

「な、なんでもないわよっ。カイルのばかっ」

聞き返したとたんに、なぜかシエラは激怒して肩を震わせた。本当に今日はよく怒られる日だ。

と、

「あいかわらず素晴らしい剣技だね、シエラ。カイルごときでは相手にもなるまい。今度は俺にも一手ご教授願えないかな？」

「アドルファス……」

二人に近づいてきたのは気障ったらしい顔だちの騎士だった。アドルファス・マーレイ。年齢はカイルよりも三つ年上の二十四歳。男爵の地位を持つ貴族であり、白翼騎士団屈指の実力を誇る騎士でもある。また剣だけでなく魔法の技術も一級で、魔術学の博士号を持っているまさしく文武両道の剣士だった。

その地位と能力、秀麗な面立ちとがあいまって、アドルファスは宮廷の女性に抜群の人気を誇っている。ただし名うての遊び人で泣かされた女は数知れず、という噂も聞き、カイルは彼に対してあまり良い印象を持っていない。

「『ごとき』とはなによ、『ごとき』とは。カイルを馬鹿にしないで」

「おやおや、そんな序列の低い騎士を気にしているのかい？　どうせなら俺を気にしてほしいものだね」

「気にさせてみなさいよ。口先じゃなく、剣で」

シエラは勝気そのものの顔でアドルファスを挑発する。

「ならば、お互いに持てる力のすべてを出しきって戦おうか。持てる力の――すべてをな。たしか君に勝てば、君の恋人になる権利を得るんだったね」

獲物を前にした狩人の顔で、アドルファスが舌なめずりをする。

シエラは小さく鼻を鳴らし、剣を片手に向き直った。

「ふん、この私を相手に大きく出たものね。それとも作戦でもあるのかしら？　随分と自信たっぷりじゃない」
「君をこの手に抱けると思うとゾクゾクするよ」
「私を抱くのは、妄想の中だけにしておきなさい。うぬぼれ屋さん」
シエラはどこまでも不敵だ。自分が負けるなどとは微塵も考えていないのだろう。物怖じという言葉とは無縁の美少女に、カイルはあらためて見とれてしまう。
――こうして大勢のギャラリーが見守る中、シエラとアドルファスの決闘が始まった。
鍛錬場の中央で、数メートルの距離を置いて少女騎士と青年騎士が対峙する。
「シエラ・エンフィールド――参るっ」
吼えてシエラが突進した。彼女の戦闘スタイルは一にも二にもスピードだ。雷速と形容されるほどのフットワークでジグザグにステップを踏みながら動き回り、側面に回りこんで斬撃を繰り出す。
銀色の弧を描いて打ち込まれた剣を、アドルファスは素早くはね上げた剣で流麗に受け流した。さらに返す刀での第二撃、踏み込んでの第三撃もことごとくブロックする。
シエラがスピードに秀でた騎士ならば、アドルファスの流儀は堅牢な防御テクニックだ。青年騎士は巧みに後退しつつ、シエラに対して反撃の突きを放った。
「ちっ」

シエラは小さな舌打ちを残して跳び退り、鋭い刺突を紙一重で避ける。
「そうやってカウンターに徹するわけ？　狡い戦法だけど、この私を相手にいくら防御を固めても無駄よ。私の剣速に――ついてこられるものなどいないわっ」
シエラは地面を蹴って爆発的な加速を見せると、今まで以上の突進スピードで一気にアドルファスの間合いへと踏み込み、稲妻のごとき突きを見舞った。剣先が空気を切り裂き、鋭い音を立てる。
だがアドルファスもさるもの、のけぞるようにしてその刺突を避けてみせた。見切ったのだ。今の、シエラの一撃をも。
「さすがだな。今のは危なかった……」
声をうわずらせるアドルファスに、シエラが追撃をかける。さらに二合、三合――互いの剣が虚空に銀の軌跡を描き、ぶつかりあい、まぶしい火花を散らした。
「あなたこそやるじゃない。序列五位は伊達じゃないってわけね」
シエラの顔つきが徐々に変わっていく。口の端をかすかに吊り上げ、うれしげな笑みを象る。紙一重の勝負を――強敵の出現を喜ぶ、戦士の笑みへと。
本気になった証だった。こうなったシエラに対抗できる騎士は、王国中を探しても数えるほどしかいないだろう。
「それじゃあ、あなたの力に敬意を表して久々に見せてあげるわ」

「見せる？　なにをだ」
「本気になった私の速さを、ね」
「今までのが本気じゃなかったとでも？」
「なら――試してみなさいっ」
言うと同時に、シエラは地を蹴り、突進した。
――速い！
カイルは内心で驚嘆の声を上げた。
先ほどまでのシエラの動きが雷速ならば、今の動きはもはや常人には視認すら困難な神速の動き。瞬く間に相手の間合いへと侵入し、必殺の刺突を繰り出す。
「こ、こいつっ……！」
「ほら、どうしたの。そんな程度の腕で私に挑戦するなんて――千年早いのよっ」
雷撃を超える勢いで繰り出された剣先が、アドルファスの胸元をかすめた。
アドルファスはのけぞるようにして避けた。訓練用に刃先をつぶしてある模擬剣だというのに、胸甲には真一文字の切れ目が走っている。すさまじいまでに鋭い斬撃だ。
「さすがに、強いなっ……！」
「終わりよ」
吼えて、シエラがさらに踏み込む。

刹那、アドルファスの口元にいやらしげな笑みが浮かんだ。
「――魔力収束。発動。光よ、はじけろ」
呪言とともに左手を前に突き出し、剣を持った右手で自分の顔を覆う。同時に鮮烈な閃光がはじけ、周囲を真昼の太陽のごとく照らし出した。
「うっ、これは……！」
まぶしさに目を細めながらカイルは声を上げた。アドルファスが至近距離で光の魔法を放ち、目くらましに使ったのだ。
「卑怯なっ……！」
とたんにシエラの動きが目に見えて鈍くなった。先ほどの閃光の影響で視力を一時的に閉ざされてしまったのだろう。正々堂々を信条とする少女騎士にとって、騎士の決闘に魔法を使ってくるとは想像もしていなかったはずだ。そこがシエラの美点であり、弱点でもあった。
「卑怯？　魔法を禁じる、とは一言も言っていない。持てる力のすべてを出しきって戦うとしか、な」
アドルファスが、してやったりとばかりにほくそ笑んだ。
「くっ……見えない……」
一時的とはいえ、完全に視界を封じられたシエラの剣を、アドルファスがあっさりとた

たき落とす。シエラの剣は床に転がり、柄の部分をアドルファスがブーツで踏みつけて押さえる。

「勝負ありだな。では約束通り、俺の恋人になってもらおうか、シエラ」

がっくりと崩れ落ちるシエラの前で、アドルファスが口元にいやらしい笑みを浮かんだ。卑怯な、とカイルは心の中で罵倒したが、手段はどうあれアドルファスの勝ちは勝ちだ。

「こんな……こんなことって……」

シエラは地面に這いつくばったまま両肩を震わせていた。剣の腕に重きを置く彼女にとって、どういう形であれ他者に遅れを取ったことは相当のショックだったのだろう。おびえたような青ざめた顔で虚ろに地面を見つめている。

（シエラが負けた……）

カイルはそんなシエラを呆然とした気持ちで見ていた。彼女が負けたことにも驚いたが、それ以上に彼の心を打ちのめしているのは、シエラが常日頃から公言している台詞だった。

自分よりも強い相手じゃないと恋人にしない――その言葉通り、アドルファスは今、シエラに勝った。

（どうしよう。このままじゃシエラが）

憧れの美少女騎士が、他の男に奪われてしまう。

凛々しい美貌が、不敵な笑みが、豊満な乳房が、引き締まった肢体が、そしておそらく

はまだ誰の侵入も許したことのない処女地までも――。
それは考えただけで頭の中がカッと灼熱してしまうような、絶望的な想像だった。いまさらながらに自分がシエラをどれだけ好きであったかに気づく。恋する少女を他の男に渡したくはない。嫉妬と怒りで胸の中が激しく燃え盛る。
「聞こえなかったのか？　俺の恋人になってもらう、と言ったんだよシエラ」
アドルファスがにやけた笑みを隠そうともせず、シエラに近づいていく。清純無垢な体に手を伸ばす。
「うう……」
「まさか誇り高き騎士であるシエラ・エンフィールド卿がこの期に及んで約束を破ったりはしないだろうね？」
「そ、それは――」
「正式な決闘で俺は君に勝った。敗者はおとなしく勝者に従うんだ。それがルールだろう？」
「――お待ちください、マーレイ卿」
さすがにこの状況を見過ごすことはできず、カイルが名乗りを上げた。こみ上げる緊張を押さえ込み前へ踏み出す。
「シエラを恋人に、と狙っていたのは僕も同じです。あなたがシエラを所望するならば、

今度は僕とも戦っていただきたい」
なるべくなら『実力』をさらしたくはないのだが、そうも言っていられない。このまま手をこまねいていたら、カイルの最愛の少女が無惨に汚されてしまう。
アドルファスは露骨に不機嫌そうな表情でカイルに振り向いた。
「戦う、だと？」
「勝ったほうが――シエラを手に入れるんだ」
愛しい少女を守るために。滅多に見せない鬼気迫る顔で、カイルがアドルファスに宣戦布告をたたきつける。
「貴様ごときが俺に勝負を挑むか。まあいいだろう。シエラに俺の強さを見せつける、ちょうどいい機会だ」
「ち、ちょっとカイル、なに考えてるのよ」
「なにって……君を助けることだけだ」
驚いたようすで顔を上げたシエラに、カイルが言い放った。
「やめなさいよ。あなた、自分の序列がわかっているの。あなたとアドルファスじゃ実力が違いすぎるわ」
序列とは言葉の通り、騎士団内における剣の実力順位のことだ。これは鍛錬や定期的におこなわれる模擬試合などの成績によって決定され、アドルファスが五位なのに対し、カ

イルは百位台だった。
「でも放ってはおけないから」
「ば、馬鹿、やめなさいよ。死にたいのっ」
カイルは無言でシエラに微笑みかけると、模擬戦用の剣を取り、アドルファスに向かって歩を進めた。
「では一手ご教授願えますか、アドルファス・マーレイ卿」
「いいだろう、カイル・バレット。貴様に格の違いというものを教えてやる」
アドルファスもまた剣を構えなおし、十メートルほどの距離を置いて二人の騎士は対峙した。
「貴様ごときに魔法は使わん。剣だけで十分だ」
「剣技だけで挑むと？」
「相手がシエラならいざ知らず、貴様などに魔法は不要」
カイルはそれを聞いて内心でひそかに安堵した。もしも先ほどの決闘のように魔法を併用されたらカイルに勝ち目はない。だが純粋な剣技の勝負なら――。
まして相手はカイルの剣の腕をたいしたことがないと見下しているはずだ。その油断を突けば勝機はある。
「ほら、どうした？　遊んでやるから打ち込んでこい。俺は隙だらけなんだぞ」

シエラは激しく眉間にしわを寄せ、細い腰を波打たせるようによじった。反動で入り口にはまりこんでいた先端部が抜けそうになる。

「シエラ……ごめんよ。痛かった？」

「だ、大丈夫……続けて」

熱い吐息をこぼしながら、シエラがふたたび膝の裏に手を回し、自らM字開脚の姿勢を取った。その中心部でヌラヌラと光る女陰には、カイルの男茎の先端部だけがはまりこんでいる。

後もう少し押し込めば処女膜を破り、シエラの純潔を奪うことができる。互いの性器が結合しようとしているようすを見下ろし、カイルはあらためて下腹からどう猛な衝動がこみ上げてくるのを感じた。

この可憐な美少女騎士の純潔を奪いたい、と思った。恋する相手への独占欲であり、同時に男としての本能的な衝動でもあった。愛しい少女の体を自分のもので奥まで貫き、初めての証を自分のものにしたい。誰にも渡したくない。

カイルは腰と下肢を踏ん張り、先ほど以上に体重を浴びせていった。さすがに処女の抵抗感はキツかったが、ペニスをねじり入れるような腰使いで、前へ前へと押し進めていく。

もちろんあまり無理強いをしないよう、シエラが苦悶の表情を浮かべていないかどうかは、ちゃんと見守っている。

えっちシーン試し読み！ここからスタート！

シエラもまたどこか虚脱感のある微笑を浮かべ、小さくうなずいた。

――来て。

藍色の目線がそう訴えかけているのを悟り、カイルは最後の力をこめ、シエラの腹の底へ向かって肉棒を突き上げる。途中で出っ張ったなにかを引き裂くような感触があった。処女膜だろうか、と思った次の瞬間、亀頭の先端が膣の底のほうに当たるのがわかった。根元まで突き入れたのだ。

「うっ……や、あぁぁぁぁっ！」

シエラがひときわ甲高い嬌声を上げた。

カイルもまた挿入の感慨に全身を震わせる。

「は、入った……！」

亀頭部分を甘く押しつぶされ、中腹にはねっとりとヒダ肉がからみついている。付け根のあたりは膣の入り口によって強烈な圧迫感とともに締めつけられる。ペニスを覆う愉悦は、カイルにとって生まれて初めて味わうものだ。

おまけにシエラの胎内は火傷しそうなほどに熱く、それでいて挿入しているだけで心地よさを感じるくらいに温かい。

「私……女になったのね」

カイルが少女騎士の膣に肉茎の根元まで埋め込んだまま静止していると、シエラは呆然

とした顔でつぶやきをこぼした。さすがに胎内いっぱいに肉茎を迎え入れて苦痛を感じているのか、凛とした美貌を引きつらせている。それでもカイルに向かって懸命に笑みを浮かべてみせた。

苦痛と喜悦の狭間で微笑む年下の少女は、息を呑むほど妖艶で、カイルはその色香に圧倒されて言葉を発することもできなかった。

「……れしい」

「えっ？」

「あ、ありがたく思いなさいよ、って言ったのよ。この私が、あんたなんかにバージンを捧げて……あげたんだからね」

怒ったような、それでいてどこかはにかんだような微笑みが可愛くて、カイルはシエラの体を思いっきり抱きしめた。折れそうなほど細い腰に手を回し、自分の腰に向かって引き寄せる。

「うん、シエラの初めて……僕がもらったよ。僕も、うれしい」

男としての満足感と誇らしさ、そしてどう猛な征服感が一体となった感情は、カイルにとって今までの人生のどんな体験よりも至福であり、快感でもあった。にっこりと微笑み、結合部を揺らして恥骨を擦りつける。その衝撃にシエラは驚いたような顔であえいだ。

「あっ……う、動かさないでっ」

まだ破瓜の痛みが残っているのだろう、柳眉を寄せてシエラが苦しげに訴える。カイルは下半身を静止させたまま、しばらくの間互いの性器がつながりあった状態を楽しんだ。

生まれて初めて没入した女性の胎内は信じられないほど温かく、また強い力でカイルの男根を締め上げてくる。ひく、ひく、とわずかにうごめくヒダ肉が肉竿の表面を撫でてきて、腰を動かさなくても十分に快楽を味わうことができた。

「カイルのが、私の中でいっぱいになってる」

シエラはうっとりとした顔でつぶやいた。これほどしおらしい態度のシエラを見るのは初めてだった。いつもの男勝りの美少女騎士ではなく、処女を捧げたばかりの娘としての顔。恋する少女としての顔。

そんな彼女を見ていると、慕情と欲情が混然となってカイルは気持ちを熱く揺さぶられてしまう。ジッとしているだけでは我慢できない。早く動いて、シエラの処女肉を味わいたかった。

「そ、そろそろ、いいかな」

息を荒げて、シエラの耳元にささやきかける。

「そろそろって？」

「動きたいんだ……いいだろ」

あからさまな熱情の吐息をぶつけるように、カイルがシエラの唇を奪う。シエラは恥ず

かしそうに目を伏せ、重なりあった唇の隙間から承諾の声をこぼした。
「……好きにすればいいでしょ」
カイルは、どこまでも意地っ張りな美少女に苦笑しながら、くびれた腰をつかむ手に力をこめてゆっくり下腹部を揺らしはじめた。シエラも初めてなのだからできるだけ痛みを与えないように動かなければならない。堅さのある膣肉をかきわけ、処女の胎内で慎重に己の肉棒を滑らせていく。
「うっ……ああっ、す、すごいっ」
紅のロングヘアを揺らし、シエラは可愛らしい悲鳴を上げた。
ゆっくりと動かしているうちに、破瓜の血のぬめりか、それとも愛液が増してきたのか、カイルは抽送の摩擦感が減じてくるのを感じた。体全体を前に押し出すような感じで、滑らかな膣孔をえぐっていく。
最初はおっかなびっくりで腰を動かしていたカイルも、何度もピストンを繰り返していると次第にコツのようなものを会得していく。相手の腰のうねりにリズムを合わせて肉棒を繰り込んでいく。
「やぁぁっ、す、すごっ……カイル、激しい……激しいよぉっ」
シエラの嬌声を耳にしながら、カイルのピストン運動は加速する一方だ。腰をギリギリまで引いて雁首で膣の入り口を引っかけ、今度は亀頭で子宮口を突き上げるような勢いで

肉棒の付け根までを一直線に押し入れる。
童貞のために技巧は皆無に等しいが、己の思いの丈をすべてぶつけるようなまっすぐなストロークだった。
「ううっ、シエラの中っ……キツキツで気持ちいいよ。ああ、締まるっ……」
まるでペニスそのものを食いちぎられそうなほどの締めつけで、シエラの膣粘膜はぜん動していた。一差しするごとに内部がうごめき、別々の角度からヒダ肉がうねって肉竿の表面を摩擦する。
「き、来て……もっと、カイルを感じさせて……」
シエラは目じりに涙を溜めて懇願した。おそらくはまだ痛みがあるのだろうが、それでもカイルとの交合を望み、自らも腰を突き出してくる。
勝気な美少女のけなげな動きに、カイルは深くうなずいて、渾身の力で若茎を繰り込んだ。そのたびにピンク色の粘膜が膣の縁までめくれあがり、またカイルが腰を突き出す動きに合わせて内部に引きずりこまれていく。
「すごい……シエラの中、こんなにすごいなんて……ああっ！」
カイルとて健康な青年であり、女性の裸身を思い浮かべたり、あるいは未知の行為であるセックスを想像したりして、自慰にふけったことはもちろんある。その妄想の相手はもっぱらシエラであったわけだが、そんな自慰行為とは比較にならないほど肉根を襲う刺激

「……いいよ、カイルがしたいなら」
こく、と小さく喉を鳴らしてうなずいて、シエラが草むらの上に腰を下ろす。カイルがその上にのしかかっていく。
正常位の体勢で押し倒す――と見せかけて、カイルはおもむろに彼女の腰をつかんだ。
「え、ちょっと……!?」
驚いたような声を無視して、そのまま力任せにシエラの体を仰向けからうつぶせ状態にひっくり返す。シエラの背中にのしかかり、腰の両側をがっしりと固定する。いくらシエラが騎士団の中でも指折りの優れた体術を誇るとはいえ、こうして背後を取って力任せに押さえ込んでしまえば、もはや彼女には抵抗のしようがない。
「ちょっとどういうつもりよ、カイル！　恥ずかしいからさっさと離しなさいよ」
「今日はこっちの格好でしようよ」
「や、やだ、こんなはしたない格好で――だめぇ」
シエラの上半身は凛々しい騎士甲冑をまとったままだ。そして下半身は丸出しで獣同然に四つんばいになって、カイルに向かって引き締まったヒップを突き出している。年ごろの少女にとって、これ以上に恥ずかしいポーズはちょっとないだろう。
「ま、前みたいに正面からにしなさいよっ。こんな格好、いくらなんでも恥ずかしいってば……こら、やめなさいっ」

ちょっぱし読み
ここからスタート!

羞じらい、体を左右にくねらせながらシエラが懇願する。カイルががっちりと少女の腰をつかんでいるため身動きが取れないのだ。

眼下ではぷりぷりと肉の詰まった尻の双丘が揺れていた。新鮮な果実を思わせる尻肉は日焼けとは無縁の純白に輝き、深い谷間を形作っている。

カイルは尻肉から女陰へと視線を移した。ふっくらとした肉の丘を淡くばらついて生える恥毛が彩っている。肉付きの薄い二枚の淫唇は、処女を失ったとは思えないほどぴったりと合わさり、入り口を完全に閉ざしている。

その上部には美しい紅玉色のすぼまりが楚々としてたたずんでいた。放射状の美しいしわに飾られた菊華は排泄の器官だとは信じられないほど可愛らしい。

女としてもっとも秘められた聖域であるはずの性器も排泄器官も、すべてがカイルの眼下で息づいているのだと思うと、猛々しい興奮が下腹を突き上げ、剥き身のペニスが石のように堅くなる。

「本当に恥ずかしいんだったら。ねえ、この前と同じ格好にして……カイル、お願いだから……」

カイルはシエラの尻の中心部に顔を寄せ、薄桃色のヴァギナに口づけした。軽く唇を触れただけで、シエラはびくんと背中をそらし、引き締まった下肢を痙攣させた。かまわずにカイルは唇をシエラの淫唇と密着させ、舌をうねらせながら内部へと侵入させた。

「ああっ、だめぇ」

処女でなくなったとはいえ、シエラの秘孔はまだまだ狭く、舌を差し入れるだけでもかなりの抵抗感があった。弾力にあふれ、気を抜くと挿入した舌を外へはじき出されそうになってしまう。

カイルはシエラの尻の谷間に顔を埋めるようにして押しつけ、思いっきり力をこめて舌の付け根まで膣洞にねじこんでいった。

「や……ん、くすぐったい……ああ、いや、気持ちいいっ……はあん」

ぬめりのある粘膜を舌先でかきわけ、舌全体をねじるようにして膣内部をかき回す。粘膜は次第にとろみを増し、甘酸っぱい粘液が奥からもれだしてきた。

(濡れてきてる……!)

愛しい少女が快楽を感じていることを知り、カイルはますます口唇愛撫に励んだ。ぷっくりと充血した肉芽を口に含み、口の中で可愛らしい肉真珠をころころと転がしてやる。上唇と下唇で敏感な恥豆を挟んで緩やかに圧迫する。

「ひぁぁぁっ、あ、アソコが熱くなるっ、熱くなっちゃう……!　ああ、もうだめぇ」

シエラの引き締まった太ももはカイルがクリトリスを吸いつける動きに合わせ、小刻みに震え、キュッとせりあがった尻肉がリズミカルに弾んだ。

「もう……許してぇ。ね、カイル。これ以上されたら、私、本当にどうにかなってしまう

わ……！」

「だめだよ。もっといろいろな形でシエラと交わりたいんだ。だから――」

幾度にもわたる美少女騎士の懇願にも、カイルは止まらなかった。勝気で年下のシエラが相手だからこそ、自分がもっとしっかりしなければならない、と使命感にも似た思いで燃えていた。

双尻から顔を上げると、カイルは草むらの上で膝立ちになり、シエラの背後にのしかかった。卵のようにぷりんとした尻肉を抱え込み、張り詰めきった切っ先を中心部に近づけていく。ひくつく膣穴に亀頭をあてがうと、シエラがおびえた顔でこちらを振り向いた。

「ほ、本当にこんな格好でするの？」

「いくよ、シエラ。後ろから入れるからね」

「こんな……動物みたいな格好で……ああ、だめ」

シエラが喉を震わせてあえぐが、それ以上の積極的な抵抗をしてこない。後背位での交わりを求められたことがショックだったのか、あるいは彼女自身も心の奥底ではもっと淫らな形で交わりたいと望んでいるのか。

「恥ずかしい思いをさせてごめん。でもシエラのこんなに可愛くていやらしい姿を見たら、僕もう我慢できないんだよ。だから……いいだろ？」

カイルは震える尻たぶを鷲づかみにし、体全体を大きくしならせて下腹部をぶつけてい

く。猛りきった器官を少しずつ押し込んだ。処女同然のヴァギナは弾力感たっぷりに侵入者を押し返そうとするが、カイルは力任せにねじ入れる。

ずる、ずる、と瑞々しい美粘膜を亀頭で、肉竿でこすりながら、奥へ奥へとうがつ。すでに処女膜が失われているため、前回に比べれば幾分スムーズな挿入だ。

「はぁぁっ、入ってくるぅ……や、もっとゆっくり……！」

悲鳴を上げるシエラだが、カイルはもはや興奮のあまり自分自身を止めることができなかった。カイルのほうも初体験だった前回に比べて、今回のほうが余裕をもって行動できている。挿入の感触を味わい、シエラの内部のヒダ肉の感触を味わい、徐々に己のペニスを埋め込んでいった。

やがて付け根まで差し込むと、亀頭が子宮の入り口に当たる感触があった。カイルはプリプリとした尻肉をあらためて鷲づかみにし、自分の腰に向かって引き寄せる。互いの性器がより深くつながりあい、恥骨同士のぶつかる感触がした。

これ以上ないほど深く結合した状態で、腰を回転させて膣内を内側から押し広げ、下腹を前に突き出して亀頭部で子宮を突っつく。

「はぁぁぁっ！　いや、あっ、あぁぁぁっ！」

深々としたストロークを受けて、シエラは甲高い絶叫を上げた。さすがに、誰かに聞かれやしないかと冷や冷やして、カイルがシエラの口元を手のひらでふさぐ。

「大丈夫、シエラ？　あんまり大きな声を出すと誰かが来てしまうかもしれないよ」
「だって、すごく深くまで突くんだもの……私、この間まで生娘だったのよ。もう少し手加減しなさいよねっ」
いくら女としての顔を見せるようになったとはいえ、やはりシエラはシエラだ。カイルがたしなめると、それに反発するように勝気な言葉を返してくる。
「悪かったよ。じゃあ少しずつ強くしていくから。ね？」
こういうときのシエラには逆らわないに限るので、カイルは自分から折れて謝ると、ストロークをゆったりとしたリズムに変えて動きだした。
膣内の浅瀬を亀頭の出っ張った部分でこすりあげ、何度か擦りたててから、ゆっくりと最奥まで差し入れていく。ペニスの表皮と、粒々の多い膣内壁とがこすれて気持ちよかった。
「ああ……シエラの中、やっぱり最高だなぁ。うねうね動いて、僕のと柔らかくこすれて」
至福のため息をこぼしながら、緩慢なピストンで楚々として狭い肉洞をえぐっていく。
「これくらいの速さなら大丈夫？　痛くないよね」
耳元でささやくと、美少女騎士はまだ涙目ながらも小さく上下にうなずいた。それを確認してカイルが手のひらを離す。
「す、すごい……カイルの、私の奥まで入ってる……ああ、深いっ」
背筋をアーチ状にしならせ、シエラは天を仰いで妖しい嘆息をこぼした。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/